

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04353

研究課題名(和文) 高校における発達障害へのスティグマ改善プログラムの開発 - 生徒の教育と教員の研修 -

研究課題名(英文) Developing Anti-Stigma Program towards Neurodevelopmental Disabilities for High School Students -The Online Education Program for Students and Teachers -

研究代表者

鳥居 深雪 (TORII, Miyuki)

神戸大学・人間発達環境学研究所・教授

研究者番号：90449976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：オンラインの発達障害理解プログラム(Understanding Neurodevelopmental Disability -Introductory Course: 以下UND-ICと表記)を開発し、発達障害に対する高校生のスティグマ改善の効果を検討した。高校生476名と対照群(大学生と教員)192名の調査結果から、「社会的距離」「関心行動」「知識」の3因子を得た。高校生は「社会的距離」「知識」については「わからない」という回答が多く、UND-ICによる効果は認められなかったが、「関心行動」については有意な改善が認められた。共感的な理解から発達障害に対する関心が高まったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高校生を対象としたオンラインの障害理解プログラムでは、知識の獲得は不十分であったが、コミックスを用いた仮想接触体験により、発達障害に対する関心行動の変容を図ることができた。高校生に対して、知識よりも共感的接触体験を重視する新しい障害理解教育の方法論を提供している。さらに、開発されたスティグマ改善プログラムは、オンラインで提供されるため、いつでも、どこでも、だれでも、障害理解教育を受けられる環境を保障することになる。生徒用プログラムは日本語版に加え英語版、中国語版も開発したので、母国語が日本語でない生徒にも利用できる。さらに、教員用研修プログラムと共にWeb上に公開し広く活用できるようにした。

研究成果の概要(英文)：[Purpose] To investigate the effects of the online education program “Understanding Neurodevelopmental Disability - Introductory Course” (UND-IC). [Method] Participants: 476 high school students and a control group (192 university students and high school teachers). [Materials] Participants answered an online questionnaire before/after UND-IC whose items were scored on a 5-point Likert scale, with “I have no idea” added as a choice. [Results] We found three factors: social distance, knowledge of ND and interest and behavior towards people with ND. Many students answered “I have no idea” about social distance and knowledge. However, students changed their interest and behavior towards people with ND after UND-IC. [Conclusions] It was difficult for high school students to understand ND. However, UND-IC could help them empathize with their ND peers. Explaining ND using manga characters helped high school students develop their empathy toward individuals with ND.

研究分野：教育心理学

キーワード：障害理解教育 スティグマ 接触体験 社会的距離 知識 関心 アドボケート コミックス

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 ( 共通 )

## 1 . 研究開始当初の背景

### (1) 発達障害とスティグマ

近年 , 発達障害の存在は , 一般に知られるようになった。しかし , 身体障害と異なり , 「見えにくい障害」であるため , いじめなどの標的になりやすい。欧米に比べ , 日本社会では発達障害に対するスティグマが強く , その要因には障害に対する誤った知識などがある。

### (2) 高校におけるスティグマ改善プログラムの重要性

高校においても発達障害のある生徒の存在は報告されており , 特別支援が必要である。また , 障害理解教育を行う最後のチャンスである。しかし , 高校教員の中には , まだ「適格者主義」も残っており , 障害に対する教員のスティグマも根強い。スティグマ改善のための高校生向け教育プログラムや , 教員向けの特別支援研修プログラムを開発することは社会的にも重要である。

障害に対するスティグマには可変性がある。スティグマには文化差があるが , 正しい知識の獲得がスティグマの改善に貢献することは文化を問わない。日本社会は , 多様性を尊重し , 共生社会の実現をめざしている。発達障害に対するスティグマを改善していくことは , 共生社会実現のための重要な課題の一つである。

## 2 . 研究の目的

本研究の目的は , 高校教育における発達障害に対するスティグマの実態を調査するとともに , 改善のために , オンラインで利用できる生徒用「障害理解教育プログラム」と教員用「研修プログラム」を開発することである。また , 英語版 , 中国語版も作成し , 母国語が日本語ではない生徒も利用できるようにする。

## 3 . 研究の方法

(1) 研究協力校のリクルート : 教育委員会を通じて高等学校長に依頼し , 協力承諾を得られた 3 県 1 政令市 7 校の高校生 476 名 ( 男性 181 名 , 女性 285 名 , 性別無回答 10 名 ) を対象にオンラインによる調査およびプログラムを実施した。調査した高校生の概要は , 課程は全日制 474 名 , 定時制 2 名 , 学科は総合学科 214 名 , 普通科 150 名 , 専門学科 91 名 , その他の学科 15 名 , 不明 6 名であった。高等学校教員は , 140 名 ( 男性 91 名 , 女性 46 名 , 性別無回答 3 名 ) から回答を得た。教員に , 研究協力の承諾を得た大学生 52 名 ( 男性 21 名 , 女性 29 名 , 性別無回答 2 名 ) を加え , 対照群とした。

(2) 調査項目 : スティグマの測定には Bogardus (1933) の「社会的距離」尺度を参考に , 鳥居他 (2016) が高校生の生活に合わせて改変したものを用いた。社会的距離 6 項目 , 知識 6 項目 , 日常生活に関する態度 4 項目 , 障害に対する関心・行動 5 項目について回答を得た。対象が高校生であること , オンライン調査では質問ができないこと等を考慮し , 5 件法 ( あてはまる 1 ~ あてはまらない 5 ) に加え , 「わからない」という選択肢も設けた。

### (3) オンラインプログラム「発達障害の理解 基本コース」

( Understanding Neurodevelopmental Disability -Introductory Course: 以下 UND-IC ) UND-IC は , 69 枚のスライド画像を用いて , ND の基本的な情報を説明するプログラムとした。高校生にわかりやすく , また興味が持ちやすいものとするために , コミックスの形式を取り入れ , 平易な文章を用いた。ADHD のある高校生の主人公が ND に関する説明を行う , という設定にし , 仮想集団接触となるようにするとともに , アドボケートの意味合いも持たせた。さらに , 社会モデルとしての障害についても説明し , 差別や偏見のない社会を作っていくことの重要性も伝えるものとした。

(4)手続き:オンライン調査システム SurveyMonkey を利用して実態調査及び「障害理解教育プログラム」を実施し、プログラム実施後同じ質問項目に回答を得ることで効果の測定を行った。各高等学校のコンピュータールームで、個別にインターネットにアクセスし、最初の画面でインフォームドコンセントを得られた生徒が回答した。教員についても同じ手続きで調査を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1)高校生の実態

多くの高校生は発達障害に関する知識や社会的距離に関する質問について「わからない」ということが明らかになった。一方、関心行動については「わからない」が少なかった。高校生群は「わからない」の回答が多かったため、対照群の回答について因子分析を行った。固有値の値から3因子を採用し、最小二乗法、プロマックス回転で因子分析を行った。第1因子:社会的距離( = .840), 第2因子:関心行動( = .766), 第3因子:知識( = .654)と命名した。

92.7%の高校生は、これまで障害のある人との接触経験を有していたが、接触経験の質が、「とてもよい」「ややよい」とポジティブだったのは、48.7%であり、逆に「やや悪い」「とても悪い」としたのは高校生群で5.9%であった。接触体験の質が

Table 1 接触体験の質と社会的距離、知識、関心行動

因子	接触体験質	高校生群				対照群			
		n	平均値	SD	有意差	n	平均値	SD	有
社会的距離	ポジティブ	124	1.91	0.73	***	64	1.93	0.52	
	非ポジティブ	129	2.45	0.88		93	2.36	0.76	
知識	ポジティブ	92	1.90	0.55	***	65	1.37	0.31	
	非ポジティブ	74	2.26	0.64		92	1.56	0.49	
関心行動	ポジティブ	199	3.65	0.86	***	71	2.40	1.02	
	非ポジティブ	250	4.11	0.75		104	2.86	0.99	

注) 数値は小さい方が、社会的距離は近い、知識は正しい、行動は機会が多いことを示す。

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$

「とてもよい」「ややよい」であった群をポジティブ群、それ以外を非ポジティブ群として、対応のある  $t$  検定を用いて社会的距離、知識、関心行動との関連について検討したところ、すべての因子でポジティブ群の方が有意に良好であった。(Table1)

これまでの行動としては、「自分から声をかけた」は程度の差はあるものの高校生群でも80%以上が経験しているが、「ボランティア活動」については、全くないものが69.7%であった。また、「テレビ番組など」の視聴や「話題にした」のは、約半数であった。(Table2)

Table 2 発達障害に関する主な情報源

情報源	高校生群		対照群	
	n	%	n	%
テレビやラジオ	214	45.0	84	31.0
インターネット	164	34.5	97	35.8
学校の先生	133	27.9	91	33.6
友人・知人	98	20.6	22	8.1
SNS	94	19.7	19	7.0
家族	69	14.5	17	6.3
新聞	42	8.8	50	18.5
聞いたことがない	42	8.8	2	.7
その他	7	1.5	28	10.3

##### (2)「障害理解教育プログラム」の効果

高校生は、知識、社会的距離に関して、「わからない」という回答が多かったが、UND-IC 実施後も「わからない」回答は減らず、質問によってはむしろ増加した。高校生にとっては、知識の獲得が社会的距離の改善にはつながらなかった。ひとつの可能性としては、表面的な理解から一段深い理解になったことで、簡単に判断できない、と考えるようになったことも考えられる。知識の獲得では有効性が認められなかったにもかかわらず、関心・行動に対する効果は、高校生群は対照群よりも有意に大きかった (Table 3)。自由記述の感想では、コミックスを用いたことが「わかりやすかった」というものが多く見られたことから、UND-IC の

表現方法は高校生にとって有効だったと考えられる。

これまでの大  
学生や成人を対  
象にしたステイ  
グマ改善プロゲ  
ラムでは、知識の  
獲得の有効性が  
いわれている。ま  
た、徳田（2003）

Table 3 学習前後の関心行動の変化の対照群との比較

行動	高校生群		対照群		自由度	t	有意
	平均値	SD	平均値	SD			
話しかける	-.32	1.64	.20	1.35	361	4.004	**
遊びに誘う	-1.62	1.33	-1.08	1.57	262	3.901	**
ボランティア活動に参加する	-1.92	1.23	-1.46	1.43	265	3.752	**
家族や友人と話題にする	-1.05	1.44	-.13	1.29	332	7.580	**
テレビ番組などを見る	-1.32	1.29	-.34	1.15	332	9.043	**

は、障害理解の発達段階として、第1段階：気づきの段階、第2段階：知識化の段階、第3段階：情緒的理解の段階、第4段階：態度形成段階、第5段階：受容的行動の段階、という5段階を示した。しかし、本調査の結果からは、必ずしもこの段階を踏んで障害理解が進んでいくわけではなく、知識化が十分でなくても、第5段階の受容的行動が形成される可能性が示唆された。

協力者の中には、障害のある当事者が高校生群に19名、対照群に5名含まれている。そのうち高校生14名、対照群4名が自由記述として感想を書いている。高校生の感想としては「ADHDについて共感することが多くほっとした」「最適環境であれば差をなくすことができる」と再認識できた、「ADHDであるが、人よりも優れたことがあるのを最近忘れていて自信を無くしていたが、自信を取り戻すことができた」「自分の支えになった」と、肯定的であった。仮想接触体験を想定し、さらにアドボケートの要素を持たせたことは、有効だったと言える。

### (3)本研究の限界と今後の課題

高等学校における特別支援教育の必要性は言われているものの、障害理解教育は十分に行われていない。その要因のひとつに、各地域に、必ずしも専門性の高い識者がいるとは限らず、教員の研修や生徒への教育の機会が保障できないことがある。オンラインによるプログラムの提供は、いつでも、どこでも、だれでも、障害理解教育を受けられる環境を保障することになる。

コミックを用いたUND-ICは、発達障害に関心を持つきっかけとして有効だったが、オンラインでのプログラムは、個に応じた配慮が行いにくく、また、各生徒のトレーニングに対するモチベーションや参加態度が確認できない。今後、このような点に対する改善を加えていくことで、オンラインによるプログラムの効果を高めることが必要だろう。

#### <引用文献>

Bogardus, E. S. (1933). A social distance scale. *Sociology and Social Research*, 22, 265–271.

徳田克己 (2003). 障害理解の発達段階を考慮した福祉教育の進め方. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 45(0), 72. doi:10.20587/pamjaep.45.0\_72

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鳥居 深雪, 梅田 真理, 近藤 武夫, 小川 修史, 式部 陽子, 西尾 祐美子	4. 巻 61
2. 論文標題 高校生に対するオンライントレーニングのスティグマ改善への有効性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育心理学会第61回総会発表論文集	6. 最初と最後の頁 263
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Fumio Someki, Miyuki Torii, Patricia J. Brooks, Tastuya Koeda, Kristen Gillespie-Lynch	4. 巻 76
2. 論文標題 Stigma associated with autism among college students in Japan and the United States: An online training study	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Research in Developmental Disabilities	6. 最初と最後の頁 88-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ridd.2018.02.016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 西尾祐美子, 鳥居深雪	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 知的障害を伴う自閉スペクトラム症女子の思春期における課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 131-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鳥居深雪	4. 巻 15(4)
2. 論文標題 発達障害のある子への「合理的配慮」とは	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 LD, ADHD & ASD	6. 最初と最後の頁 16 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Miyuki Torii, Fumio Someki, Yumiko Nishio, Mari Umeda, Hisashi Ogawa, Takeo Kondo, Yoko Shikibu
2. 発表標題 Effectiveness of an Online Program Using Manga to Change Japanese High School Students' Attitudes Toward Individuals with Neurodevelopmental Disabilities
3. 学会等名 International Society for Autism Research 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鳥居 深雪, 梅田 真理, 近藤 武夫, 小川 修史, 式部 陽子, 西尾 祐美子
2. 発表標題 高校生に対するオンライントレーニングのスティグマ改善への有効性
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥居 深雪, 梅田 真理, 近藤 武夫, 小川 修史, 式部 陽子, 西尾 祐美子
2. 発表標題 発達障害に対する高校生のスティグマの実態 -オンライン調査の結果から-
3. 学会等名 日本LD学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥居 深雪, 梅田 真理, 桂 志保, 西尾 祐美子, 小川 修史, 石川 照子
2. 発表標題 高校における発達障害へのスティグマ改善プログラムの開発
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鳥居深雪、梅田真理、小川修史、西尾祐美子
2. 発表標題 発達障害に対する高校生のスティグマの改善に向けて-オンラインプログラムの可能性-
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥居深雪
2. 発表標題 自閉症スペクトラムのある子どもと青年への教育的支援
3. 学会等名 第59回日本小児神経学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鳥居深雪
2. 発表標題 高機能の生徒に対する特別支援教育モデルの検
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鳥居深雪，島田育夫，桂志保，白井俊介，古川堅太郎
2. 発表標題 高等学校における通級による指導モデルの検討
3. 学会等名 第59回日本教育心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鳥居深雪
2. 発表標題 発達障害のある青年の自立に向けての課題
3. 学会等名 第29回発達心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 式部陽子
2. 発表標題 高等学校定時制課程におけるティーチャートレーニング
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>鳥居研究室Webにて、開発したプログラムを公開している。  <a href="http://www2.kobe-u.ac.jp/~snowbird">http://www2.kobe-u.ac.jp/~snowbird</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	近藤 武夫  (KONDO Takeo)  (00379869)	東京大学・先端科学技術研究センター・准教授   (12601)	



## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	式部 陽子 (SHIKIBU Yoko) (20737431)	帝塚山大学・心理学部・講師  (14601)	
研究分担者	梅田 真理 (UMEDA Mari) (50529138)	宮城学院女子大学・教育学部・教授  (31307)	
研究分担者	小川 修史 (OGAWA Hisashi) (90508459)	兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授  (14503)	
研究分担者	西尾 祐美子 (NISHIO Yumiko) (50801594)	畿央大学・教育学部・講師  (33307)	